

KELES Newsletter

関西英語教育学会報 2021年度 第1号

事務局：〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学 教育学部 教員養成課程 橋本健一研究室内

E-mail: kelesoffice@gmail.com 学会ウェブサイト: <http://www.keles.jp/>

2021年7月25日発行



巻頭言

やってごらん

関西英語教育学会幹事長 橋本 健一（大阪教育大学）

「今回だけはやむを得ないですね…」

1年前の年度はじめに何度となく交わされた言葉です。個人的に学内外に関わっていた多くの事業が延期・中止・開催形態の変更を余儀なくされ、KELESでも6月の大会をオンデマンドで開催することとしました。あくまでもそのような対応は一時のもので、2021年度にはある程度元通りになるだろうと考えていたところ（今考えると甘い見通しですが…）、よもや1年がたった今現在でも多くの制約が残ったままとなり、今年6月の年次大会が再びオンライン開催になるとは思ってもいませんでした。

その年次大会ですが、今回は開催形態がZoomであるということを除けばほぼ例年通りの内容・ボリュームとなり、個人的な反省点は挙げだしたらキリがないほどありますが、全体としては大きな問題もなく盛会だったのではないかと思います（ご迷惑をおかけした皆様には心よりお詫び申し上げます）。講演・ワークショップの講師の先生方、ご発表・ご参加くださった皆さま、そして準備段階で様々なご尽力くださった役員の先生方のご協力のおかげであり、改めて心からの御礼を申し上げます。

それに加えてもう1つ、事務局としては

KELESが持つ「何事にもチャレンジさせてくれる文化」に助けられたと実感しています。年次大会が始まる際、バタバタはしていましたが不安・心配といった感情はあまりありませんでした。昨年のオンデマンド年次大会以降、複数回のセミナー・研究大会を開催しましたが、学会としてできる限りライブ感のある時間にしたいという想いから、基本的にはZoomでの同期型イベントとして実施しました。卒修論セミナーでは複数の部屋の並行開催も行いましたが、トラブルがあった際の対応が可能なのかということで、当初実行委員の間でも開催方法については意見が分かれました。それでもチャレンジする方向に進めたのは、これまでにこの学会に関わってこられた方が作りあげてきた「やってごらん」という文化のおかげだと思っています。この時の経験と、まさに「やってごらん」の精神が今年度の年次大会成功の大きな要因であったと思います。

卒修論セミナーにしても研究大会にしても、意欲的な研究・実践発表が多く集まるのもこういった文化があつてこそでしょう。この良い空気を皆さんと引き続き共有したい、もう一度甘い見通しをするなら来年あたりは対面で、と思う今日この頃です。

報告 関西英語教育学会2021年度（第27回）研究大会

開催日：2021年6月12日(土)・13日(日) オンライン開催

2021年6月12日(土)・13日(日)に、第27回となる研究大会が開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響で今年度もオンラインでの開催となりましたが、遠隔参加が容易になるという利点もあり、田中武夫先生によるご講演をはじめとして6件の企画ワークショップ、ランチョンセミナー、公募ワークショップ、それに研究発表・事例報告が10件と盛りだくさんの内容となりました。事前参加登録と講師の先生方をあわせて約150名がご参加くださって、Zoom上の限られた中ではありましたが、様々な質疑応答がなされて盛会のうちに2日間の大会日程を終えることができました。

講師をお引き受けくださった先生方をはじめ、ご発表くださった皆様、参加してくださった皆様、準備段階・当日とご尽力くださった役員の皆さまに心から感謝申し上げます。なお、当日のプログラム・発表概要等の詳細については、年次大会特設ウェブサイト(<https://sites.google.com/view/keles2021>)をご覧ください。

企画ワークショップ

外国語の語彙習得：その理論と実践について
考える

鬼田 崇作（同志社大学）

外国語の語彙習得の分野でご活躍の鬼田先生のワークショップということで、最新の研究成果をもとにした語彙学習・指導のヒントを伺えると期待して参加したところ、それにとどまらず英語教育全体で理論と実践の往還をどのように考えていくべきかという広く重要な問題についても、専門分野の1つとして挙げられている天文観測も交えた大変興味深いお話を拝聴することができた。

前半の語彙習得についてのパートでは、理論とは「現象に対する予測・説明だけでなく、未だ見ぬ世界への予測」を可能にするものであると示された上で、語彙習得についてのこれまでのご研究を

TOPRA（処理資源配分）モデルやInvolvement Lord Hypothesis (ILH：関与負荷仮説)に基づいてご紹介くださった。語彙指導・学習においてしばしば議論の対象となる「語彙学習の際には意味と形式のどちらに焦点を当てるべきか?」「絵や写真は毎回同じものを提示すべきか異なるものを提示すべきか?」「語彙学習は読解と作文のいずれを通して行うべきか?」という問いに対して、TOPRAモデルやILHではどのような予測がなされ、実験結果ではどのようなことが明らかとなったかをお示しくださった。

後半ではそのような研究成果から得られる語彙指導・学習への示唆をどのように評価するかという点について、外国語教育における量的研究への批判的検討や心理学の再現可能性問題に触れつつご提案いただいた。非常に多くの要因が関わる語彙の指導・学習において、「語彙習得理論は実践において教師が意思決定を行う際の参照情報の1つである」という最後のお言葉は、広く英語教育全体を考える上でも重要なご見解であると感じた。

理論・実践の立場からの多様な質疑応答も含めて、聴衆一同の思考を様々な角度から促す素晴らしいワークショップであった。

（報告者：大阪教育大学 橋本 健一）

英語教材の文字の話：「文字指導」を語るなら、
このくらいのことを考えておいてはどうか

松井 孝志

松井先生のワークショップでは、実際に手を動かしながら、文字についてそして文字指導について考える時間となった。

冒頭、不適切な文字指導としてSNSで紹介されていた例を取り上げ、それが何故不適切なのかを説明された。その中で、入門期において、指導者の責任は大きいものの、学習指導要領ではそうした指針が明確になされているとは言えないこと、日本の英語教育では音声指導はなされているが、文字指導はほとんどなされていないことを問題提起された。

そこから実際に活字として用いられているフォントにはどのような工夫がなされているのかに話が及んだ。手書きに近い欧文フォントでは、実際に書く

ときの軌跡が明確にわかるよう、フォントが作られている。こうした話をされながら、Sassoon系フォント、UD（ユニバーサルデザイン）フォント、教育用フォントのそれぞれの特徴について解説された。

それを踏まえた上で、実際に現行の教科書を見て、どのような問題があるのかを豊富な具体例をもとに解説された。例として、‘a’というアルファベットがフォントによって見え方が違うにもかかわらず、同じ教科書会社の中で違うフォントが用いられていることや、同じ教科書の中で手書きに近いフォントからそうでないフォントに変わっていることを指摘され、そうした学習者の目にする文字に、意識的に目を向けるよう説かれた。

何気なく使っているフォントで、学習者に影響を与えることがあることを豊富な事例から大いに学ばせていただいたワークショップであった。

（報告者：神戸市立工業高等専門学校 南 侑樹）

Effective grammar teaching and activities that can improve students' Willingness to Communicate (WTC) in the Japanese EFL classroom

佐藤 臨太郎（奈良教育大学）

ご講演の前半では、WTCの概念や関連研究を紹介され、熟達度の異なる学習者層それぞれに適切な文法教授法を示唆くださった。中盤には、高校現場のaction researchを通して、文法指導とWTCの変容について解説をいただいた。後半は、これからの文法指導におけるRevised PPP Modelを提案された。文法導入時、inputに既習項目を盛り込むことで、生徒の気づきを生起させることはもちろん、新出文法でも文脈内であれば、生徒が推測できるとのこと。生徒へ与えるinputを綿密に計画すれば、後続する文法説明への必然性が生まれることを理解できた。新出項目と既習項目の差や、特定の場面で共通して使われる文法があれば、生徒の「何これ？」という好奇心を刺激し、文法項目を文脈から切り離すことなく、生徒の言語理解・処理を助ける重要なステップになるだろう。また練習活動では、機械的学習の有用性に言及された。これは、高校生のように熟達度の高い生徒のWTCを下げないためにも、accuracy-centredな練習をするべきというご講演の前半部分の内容にも関連するものであった。一方で、これまでの文法指導における過度な機械的練習への依存を指摘され、よりcreativeな練習の必要性を強調された。生徒たちのoutputへどのように

feedbackすべきか、今後、文法項目や習熟度別に検証するのも面白そうである。産出活動の最終段階としてはinteraction活動を紹介されたが、いつどのタイミングで活動をさせるかはまだまだ検証の余地があるとのこと。確かに、習熟度の高い学習者であれば、ターゲット文法を習う前に何らかのinteractionに取り組ませ、その中で自分の中で言えなかったことに気づかせることでその後の文法導入につなげやすいかもしれない。ただ同時に、習熟度の高い学習者は「表現できる英語の限界」に直面したときにWTCが下がってしまうという冒頭の研究結果を踏まえれば、やはりそれぞれの学習者の様子を踏まえて、教員自身がバランスをとっていく必要があるようである。ご講演の最後にはL1を使用するタイミングや理由にも触れていただけたことは、多くの中高教員にとって有益であった。限られた時間ではあったが、改めて各々の文脈での文法指導について再考する機会をくださった佐藤先生には感謝で一杯である。

（報告者：関西大学第一高等学校 山形 悟史）

小学校でのより良い英語授業を実現するために

物井 尚子（千葉大学）

本ワークショップを通して、小学校外国語活動、外国語科で指導者がどのように児童に関わり、彼らの学びの特徴を捉え、支援をすればよいのかを考えさせられた。また、物井先生ご自身が小学校で児童にご指導されておられる授業の様子や児童の発言を紹介していただき、彼らが先生とのやり取りを通して英語を考えながら学んでいる姿が浮かび、ほのぼのとした気持ちにさせられた。

物井先生はまず、言語習得に関する理論について、普遍文法や用法基盤モデルなどを取り上げ、子どもは自ら言葉を作ることができたり、コミュニケーションの中で実際に聞いたり使用したりすることで言語習得が進むことを事例を挙げて説明された。次に、大人の視点で子どもの学びを見ないようにしましょうと過去形、冠詞、複数形などの例を挙げて語られた。その後、小学校英語教育で大切にしたいこととして、言葉の習得のプロセスを踏まえた指導を行い、「質」の良いインプットを大量に与え、取り込む際の3条件と共にパターンを導きやすいインプットをすることを強調された。また、子どもが自分で考え、思いを表現していく場を用意することが大切であり、教師は児童が「自分の思いを言語化する」ために必要な言語材料を提供するのが仕事であ

ると述べられた。さらに、発達段階・学びの特性に応じた指導を行う際には、児童の知的好奇心をくすぐるような内容や本物の情報を扱い、英語で得た情報を用いて活動する経験が必要であり、文構造についても自分なりのルールを発見させることの大切さを話された。授業実践では、「後連（あとれん）」を取り入れる方法も教えていただいたが、是非使ってみたいと思われた先生も多かったのではなかろうか。理論と実践の両面から大変学びの多い、かつ時間も忘れる楽しいワークショップをしていただいた物井先生に心から感謝申し上げたい。

（報告者：関西学院大学 泉 恵美子）

初等・中等教育とオンラインの狂想曲：システムと機材と教員と

真島 由朱（大阪府立箕面高校）

本WSの講演者の真島先生は大阪府立高校に外国語科教諭として勤務されておられる。また、Googleの認定トレーナーの資格もお持ちであり、コロナ禍により進んだGIGAスクール構想における整備を校内で（狂想的に）推進しておられる。その真島先生が学校のICT整備が「うまく回る」条件として示されたのが「機材」「学校を取り巻く環境・システム」「教員スキル」であった。機材とはまさに、各生徒に配布される端末や、学校に整備されている通信設備である。大阪府の場合、Google Workspace for Educationが導入されている。そのサービスを使用するには相応の性能の情報端末とネットワークの整備が必要であるが、現段階においては現場の教員には選定権がなく、まだ発展途上であるという印象を受けた。現場の教員が使用したい端末を選択し、採用することが健全であると感じた。

「学校を取り巻く環境・システム」についても、働き方に起因するミスを重ねた結果「こういうシステムになったのだろうか」と感じる環境に教員や生徒が置かれていることにも衝撃を受けた。教師がやりたいことが授業内でストレスなく展開できる日はまだ遠そうである。

最後に「教員スキル」についてであるが、業界内でも闇が深い話題について明るく端的に（必要なところは優しくぼかしながら）ご説明いただいた。学校では様々な相談が「詳しい人」に降りかかる。それから逃れる方法はとにかく「爪を隠す」に尽きるのであるが、真島先生はそのポジションとしてご活躍され、勤務校だけでなく誰でも参照可能のようにマニュアルの共有を行っておられる。外国語教育は

authenticなマテリアルに言及され始めた頃からICT教具の活用について前向きに取り組んでいる分野であるが、そうであるからこそ理想的な活動を行うためには機材&環境整備・教員研修が必要であるという原点にもどって、現在進行中の政策への現場からのフィードバックとして有意義なWSであった。

（報告者：大阪府立大学工業高等専門学校 谷野 圭亮）

タスク教材集から考える英語の授業

加藤 由崇（中部大学）

加藤先生のワークショップでは、タスクについての研究動向をお話される中で、研究上の課題として開発の過程や具体例を示した研究の少なさについて述べられ、近年ではタスク集（task bank）という「教材の選択・配列を実践者に委ねる」「タスクの具体例（素材・教材、アイデア）を提供」する考えがあることを紹介された。また、加藤先生の編著書である『コミュニケーション・タスクのアイデアとマテリアル 教室と世界をつなぐ英語授業のために』を執筆された経緯についてお話された。同書では、タスクタイプや活動形態（ペア・グループ）・レベル（CEFR基準）・時間・準備と手順・言語表現が紹介されている。さらにはそれぞれのタスクに製作者のメッセージとしてどのような狙いがあるか、また指導のポイントがあり、指導者に寄り添った構成となっている。

その後、参加者の方々とグループワークで実際に本でも紹介されている5種類のタスク（情報伝達・情報合成・ナレーション・問題解決・意思決定）について1つを選び、その指導のあり方について意見交換をし、グループワーク終了後、発言内容を代表の方が報告をするという「タスク」を行った。グループワークの中では、その選んだタスクでの指導形態（投げ込み・帯活動）・言語使用（日本語・英語・translanguage）・指導方法（TBLT・PPP）・評価面と多方面から議論がなされ、またそれぞれの代表の方が簡潔にまとめておられた。また加藤先生はその報告に対し当意即妙に、用意されたスライド資料や授業で用いられた資料を提示し、具体例を交え全体にフィードバックされていた。

今回のWSおよび『コミュニケーション・タスクのアイデアとマテリアル 教室と世界をつなぐ英語授業のために』で紹介されているタスクは決して難しいものばかりではない。どんな校種、熟達度でも使用できそうなものばかりである。加藤先生の洗練

されたご発表同様にきめ細かな設計がなされている
タスクばかりで、ぜひ多くの先生に同書を手に取っ
ていただきたいと感じた。

(報告者：神戸市立工業高等専門学校 南 侑樹)

ランチョンセミナー

教師としての私：現職教員による対話

登壇者：北野 梓（大阪教育大学連合教職大学院・

富田林市立高辺台小学校）

山本 絢子（立命館宇治中学校・高等学校）

首藤 紗果（大阪教育大学附属平野小学校）

コーディネーター：加賀田 哲也（大阪教育大学）

3名の現職英語教員の方にお集まりいただき、大
学・大学院での研究が今の仕事にどう活かされてい
るか、教師としての生きがいや目指す教員像といっ
たテーマについてお話しいただいた。

お三方とも学部時代は英語教育以外の専攻で学ば
れていたが、それぞれの専攻での学び（プロジェク
トベースの学びや国際交流等）が教員としてのベ
ースになっていて、さらに大学院での研究で行った教
材研究・作成や評価についての検討が、担当されて
いる英語の授業に役立っている（あるいはこれから
役立つと期待される）ことについて異口同音に語ら
れた。中盤では3名の登壇者がそれぞれに質問をし
あって、それぞれの現場での悩みに対して考えるヒ
ントを話し合い、それに対してコーディネーターの
加賀田先生からの的確なコメントがなされる様は、ま
さに大学・大学院でのゼミにおいてどのような議論
がなされ、そこに集うすべての人の思考が深まって
いくのかという良き姿を垣間見たような気がした。
最後にこれから教員を目指していく学部生・大学院
生や若手教員に向けてのメッセージということで、
所属する大学の外での仲間作りの場として、将来教
壇に立った時にやってみようと思える実践に出会う
場として、そして学び続ける教師・研究者として活
動する場として学会という場があるのでぜひ関わっ
てほしいというお言葉をいただいた。参加し
た方が幅広く共感できる素晴らしいお話であった。

(報告者：大阪教育大学 橋本 健一)

講演

英語授業における発問づくり：教科書本文をもとに した教師と生徒の英語によるコミュニケーション

田中 武夫（山梨大学）

英語リーディング授業では、生徒・学生の興味を
途切れさせず読みを深める授業展開が必要である

が、時に単調になってしまうという悩みをお持ちの
先生もいらっしゃるのではないだろうか。今回は、
長年にわたり発問に関する多くの著書を執筆されて
いる田中武夫先生に、小学校・中学校・高校編とし
て、発問づくりにおける注意点についてご講演いた
だき、そのようなリーディング授業における悩みを
解決しつつ、日々の授業で無理なく実践できるよう
な授業ヒントをお話しいただいた。

発問とは、授業目標の達成に向けて、児童・生徒
が主体的に教材や活動に向き合うように計画的にデ
ザインされた教師の「指導言（説明、資料、表情、
ジェスチャーなど）」のことである。また、テキス
ト理解を深めるためにテキストの事実内容を問う
「理解発問」、文章の概要を捉えさせるために文章
から推測される内容を問う「推論発問」、そしてさ
らに思考を深めさせるために自分自身のことにつ
いて表現させる「表現発問」を計画的にデザインする
ことが重要であると話された。印象的だったのは、
計画的なデザインのためには、目標設定・教材解
釈・生徒把握・授業構想をする必要がある、とい
うことであった。というのも、田中先生が、日々目
前の生徒・学生を丁寧に観察され、入念な授業準備
と授業計画をされていることが伝わり、非常に説
得力があったからである。同時に、教員としての初
心に帰ることができた。

先生がご講演の中で強調されたことは、「なんと
なく授業をするのではなく、計画的に授業をする、
つまり丁寧な足場かけのデザインこそが、教科書本
文を使った教師と生徒の本物のコミュニケーション
の場につながる」であった。教室を真のやり取りの
場につなげるには、教員としての心構えに加え人間
力も必要なのかもしれない。

Zoomによるオンラインセッションであったが、
授業ヒントが散りばめられたご講演に、多くの聴衆
が刺激を受けた。

(報告者：京都産業大学 平野 亜也子)



報告 2021年度 関西英語教育学会総会

開催日：2021年6月12日（土） オンライン開催

2021年度総会では、今野勝幸先生（龍谷大学・本学会幹事）による司会進行のもと、議長に長谷尚弥先生（関西学院大学）が選出され、2020年度活動報告および決算報告、会計監査報告、2021年度活動計画および予算案などについて報告・提案がなされ、承認されました。

1. 2020年度活動報告

研究大会等

◆ 関西英語教育学会2020年度（第25回）研究大会

日程：2020年6月13日（土）～20日（土）

開催形態：オンライン（オンデマンド研究大会）

内容：会員総会・シンポジウム1件

◆ 関西英語教育学会2020年度（第26回）研究大会

日程：2020年11月8日（日）

開催形態：オンライン（Zoomを利用した同期型研究大会セミナー）

内容：口頭発表3件・特別講演1件・シンポジウム1件

◆ 全国英語教育学会第46回長野研究大会

新型コロナウイルス感染拡大を受けて2021年に延期

セミナー・共催行事

◆ 関西英語教育学会 第49回セミナー

日程：2020年9月27日（日）

開催形態：オンライン（Zoomを利用した同期型セミナー）

テーマ：英語学習へ苦手意識を持つ生徒への指導 ～中・高・大の教育実践から～

◆ 関西英語教育学会 第50回セミナー

日程：2020年12月20日（日）

開催形態：オンライン（Zoomを利用した同期型セミナー）

テーマ：英語のアウトプットにおける指導と評価を考える

◆ 関西英語教育学会 第24回卒論・修論研究発表セミナー

日程：2021年2月11日（木・祝）

開催形態：オンライン（Zoomを利用した同期型セミナー）

内容：口頭発表8件・スペシャルトーク

紀要『英語教育研究』

第44号刊行（紀要編集委員会）

課題研究プロジェクト

「アクティブ・ラーニングを活用した英語授業」（プロジェクト・リーダー：泉恵美子（関西学院大学）、研究期間：2019～2022年度、4か年）

授業研究プロジェクト

なし

広報・発行

- ・ニューズレター 年4回発行（7月、12月、1月、3月：他メール配信）
- ・紀要『英語教育研究』第44号刊行（紀要編集委員会）
- ・学会会員情報誌『KELESジャーナル』第6号刊行

2020年度決算報告

2020年度の収入・支出は次ページの表のとおり。原案通り承認されました。

関西英語教育学会2020年度決算報告書（案）

収入の部			
項 目	予算額（円）	決算額（円）	備 考
前年度繰越金	3,012,478	3,012,478	
年会費	2,600,000	2,466,000	全国英語教育学会年会費も含む
参加費	100,000	0	
論文集	50,000	45,000	学会紀要SELT論文掲載費、論文抜刷費用
その他	50,000	80,000	全国英語教育学会からの事務局補助費
計	5,812,478	5,603,478	

支出の部			
項 目	予算額（円）	決算額（円）	備 考
通信費	400,000	387,974	各種郵送代（学会紀要、ニューズレター、切手、その他）、HPサーバー管理費、振込手数料
研究費	800,000	370,000	講師謝礼、KELESジャーナル執筆料、その他
印刷費	1,100,000	748,506	紀要『英語教育研究』、KELESジャーナル、第24回卒論修論研究発表セミナー発表論文予稿集、学会封筒印刷
会議費	20,000	4,000	
交通費	120,000	0	
事務費	10,000	11,603	資料印刷代、コピー用紙、宛名シール
全国年会費	580,000	534,000	2,000円×267名
予備費	30,000	0	
計	3,060,000	2,056,083	

収入総額	5,812,478	5,603,478	
支出総額	3,060,000	2,056,083	
差引残高（次年度繰越金）	2,752,478	3,547,395	

2021年6月3日
 関西英語教育学会（KELES）会計担当幹事
 山形 悟史
 齊藤 倫子

諸帳簿照合の結果、正確かつ公正に執行され、上記に相違ないことを報告します。
 2021年6月3日
 会計監査

山本 誠子 
 氏木 道人 

2. 2021年度活動計画

2021年度役員体制

会 長

泉 恵美子（関西学院大学）

副会長

横川 博一（神戸大学）

顧 問

沖原 勝昭（京都ノートルダム女子大学名誉教授）

織田 稔（元関西大学）

瀬川 俊一（京都府立大学名誉教授）

村田 純一（元神戸市外国語大学）

吉田 信介（関西大学）

幹事長（副会長兼務）

橋本 健一（大阪教育大学）

紀要編集委員長

水本 篤（関西大学）

幹 事（7名）

今野 勝幸（龍谷大学）

斎藤 倫子（滋賀県立大学）

谷野 圭亮（大阪府立大学工業高等専門学校）

平野 亜也子（京都産業大学）

俣野 知里（京都教育大学附属桃山小学校）

南 侑樹（神戸市立工業高等専門学校）

山形 悟史（関西大学第一高等学校）

理 事（15名）

今井 裕之（関西大学）

加賀田 哲也（大阪教育大学）

門田 修平（関西学院大学）

里井 久輝（龍谷大学）

高田 哲朗（京都外国語大学非常勤講師）

竹下 厚志（神戸市立葺合高等学校）

照井 雅子（近畿大学）

中田 賀之（同志社大学）

西本 有逸（京都教育大学）

長谷 尚弥（関西学院大学）

牧野 眞貴（近畿大学）

籾内 智（京都精華大学）

大和 知史（神戸大学）

山本 玲子（京都外国語大学）

吉田 達弘（兵庫教育大学）

紀要編集委員（6名）

佐々木 顕彦（武庫川女子大学）

佐藤 臨太郎（奈良教育大学）

菅井 康祐（近畿大学）

能登原 祥之（同志社大学）

平井 愛（神戸学院大学）

山西 博之（中央大学）

会計監査（2名）

氏木 道人（関西学院大学）

山本 誠子（神戸学院大学）

※ 同職位内では50音順

研究大会等**◆ 関西英語教育学会2021年度（第27回）研究大会**

日程：2021年6月12日（土）・13日（日）

*新型コロナウイルス感染症の影響によりオンラインで開催

内容：会員総会，講演1件，研究発表・事例報告10件，公募ワークショップ1件，企画ワークショップ7件

◆ 全国英語教育学会第46回長野研究大会

日程：2021年8月7日（土）・8日（日）

*新型コロナウイルス感染症の影響によりオンラインで開催

主催：全国英語教育学会（地区学会：北海道英語教育学会・東北英語教育学会・関東甲信越英語教育学会・中部地区英語教育学会・関西英語教育学会・中国地区英語教育学会・四国英語教育学会・九州英語教育学会）

担当地区学会：中部地区英語教育学会

関西英語教育学会担当プログラム：課題研究フォーラム（1年目）

タイトル：アクティブ・ラーニングを用いた英語による発信力の育成

コーディネーター：

泉 恵美子（関西学院大学）

提案者：俣野 知里

（京都教育大学附属桃山小学校）

篠崎 文哉（大阪教育大学）

佐古 孝義

（京都教育大学附属高等学校・

京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程）

セミナー・共催行事**◆ 関西英語教育学会 第51回セミナー**

*全国英語教育学会英語教育セミナー共催

日程：2021年9月26日（日）
 開催形態：オンライン予定
 テーマ：複雑系理論から英語教育現場を考える
 講師：新多 了 先生（立教大学）
 山本 有香 先生（立教大学）
 リチャード・サンプソン先生（立教大学）
 小泉 香織 先生
 （渋谷教育学園幕張中学・高校）
 趣旨説明：中田 賀之 先生（同志社大学）

◆ 関西英語教育学会 第52回セミナー

日程：2021年11月または12月 開催予定
 会場：未定

◆ 関西英語教育学会 第53回セミナー

日程：2021年12月19日（日） 開催予定
 会場：未定

◆ 関西英語教育学会 第25回卒論・修論研究発表セミナー

日時：2022年2月 開催予定
 会場：未定

紀要『英語教育研究』

第45号刊行（紀要編集委員会）予定

課題研究プロジェクト

「アクティブ・ラーニングを活用した英語授業」（プロジェクト・リーダー：泉恵美子（関西学院大学），研究期間：2019～2022年度，4か年）

授業研究プロジェクト

新規プロジェクト1件程度採択予定

広報・発行

- ・学会会員情報誌『KELESジャーナル』2021年度内に第7号を刊行予定
- ・ニューズレター 年4回発行（7月，12月，1月，3月予定：他メール配信）

2021年度予算案

2021年度の予算案は次の表のとおり。原案通り承認されました。

関西英語教育学会 2021年度予算案

収入の部			
項 目	2020年度決算額(円)	2021年度予算額(円)	備 考
前年度繰越金	3,012,478	3,547,395	
年会費	2,466,000	2,500,000	全国英語教育学会年会費も含む
参加費	0	80,000	関西英語教育学会第27回研究大会、KELESセミナー（第51～53回）、第25回卒論・修論研究発表セミナー、セミナー等業者展示
論文集	45,000	50,000	学会紀要SELT販売、論文掲載費、抜刷費用
その他	80,000	200,000	全国英語教育学会からの事務局補助費・英語教育セミナー補助費
計	5,603,478	6,377,395	

支出の部			
項目	2020年度決算額(円)	2021年度予算額(円)	備 考
通信費	387,974	500,000	各種郵送代（学会紀要、ニューズレター、切手代、その他）、HPサーバー管理費、振込手数料
研究費	370,000	1,000,000	講師謝礼、作業補助謝礼、会場費用、KELESジャーナル執筆料、研究プロジェクト経費、大阪高英研広告掲載料
印刷費	748,506	1,000,000	紀要『英語教育研究』第45号、KELESジャーナル第7号、第25回卒論・修論研究発表セミナー発表論文予稿集、学会封筒
会議費	4,000	20,000	会議諸経費（幹事会・理事会）
交通費	0	80,000	研究大会・セミナー、幹事・理事会、全国英語教育学会理事会旅費
事務費	11,603	20,000	会議用資料印刷代、名札代
全国年会費	534,000	550,000	2,000円×275名
予備費	0	30,000	
次年度繰越金	3,547,395	3,177,395	
計	5,603,478	6,377,395	

学会事務局からのお知らせ

◆関西英語教育学会 学会誌『英語教育研究』 (SELT) 第45号 投稿論文募集のお知らせ

関西英語教育学会 (KELES) では、学会誌『英語教育研究』(SELT) 第45号 (2022年3月刊行予定) への論文投稿を下記の通り募集中です。

2021年度に開催された第27回関西英語教育学会研究大会および全国英語教育学会第46回長野研究大会での発表論文が優先されますが、これらの発表を経ない論文についても、一定の枠内で審査対象となります。会員の皆様の多数のご投稿をお待ちしております。

投稿受付期限

2021年8月31日 (火) 22:00 (午後10時厳守)

投稿にあたって

学会ホームページ (<http://www.keles.jp/activity/selt/>) の投稿要領を熟読し、テンプレート (英語・日本語) をダウンロードし、テンプレートに書かれている諸注意も熟読の上、テンプレートを用いて原稿を作成し、学会ホームページの投稿フォームから投稿してください。

掲載論文の種類

投稿論文：英語教育および広く言語教育に関する理論的・実証的研究論文 (10ページ以上20ページ以内)

研究ノート：英語授業実践に関する報告 (10ページ以内)

*いずれもページ数に参考文献、図表、註、資料を含めます。

掲載論文の著作権 (第39号より改定)

掲載論文の著作権は学会に帰属しますが、ウェブなどでの公開にあたっては書誌情報を明記した上で積極的に行えるようになりました。第39号より、J-Stageにて公開を開始しております。(詳細はhttp://bit.ly/selt_jstageを参照してください。)

投稿先および学会誌に関するお問合せ先

- (1) 投稿先：学会ホームページ (<http://www.keles.jp/activity/selt/>) の投稿フォームから投稿してください。
- (2) 投稿した日から3日以上経っても受領確認のメールが届かない場合は、お問い合わせフォームにて問い合わせして下さい。

◆お問い合わせフォームについて

下記に関するお問い合わせはフォームから事務局にお知らせください。

学会費・学会誌・研究大会・各種セミナー・入退会・会員情報の変更・その他学会全般に関するお問い合わせ

◆メールアドレスの確認について

KELESでは年次大会やセミナーのご案内、研究発表・論文投稿の募集等について、メールでののご案内を積極的に行っております。今後メールによる情報発信の割合を増やしていくことも検討しておりますので、KELESからの案内が届いているか、この機会に確認をお願いいたします。メールが届いていないという方は、恐れ入りますがお名前と配信を希望されるメールアドレスをkeles.mailaddress@gmail.comまでお送りください。

◆編集後記

オンラインでの年次大会にご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。新しいシステムを使つての事前参加登録等いろいろとお手数をおかけしましたが、トラブルなく2日間の大会を終えられたのは、一重にご参加いただいている皆さま一人一人のお力添えのおかげです。秋以降のセミナーも多くの皆さまにご参加いただければ幸いです。(KH)